

観音物語 (15) 気味わるい奴ら

が ん じ ゃ ぎ づ け だ ね ん び かん の ん り き じん じ ょ う じ え こ
 蛭蛇及び蝮蠍 気毒煙火燃 念彼観音力 尋声自回去
が ん じ ゃ ふ っ か つ け だ ね ん の お ね び かん の ん り き じ ょ う じ え こ
 蛭蛇及び蝮蠍 気毒煙火のごとく燃ゆるも 彼の観音の力を念ずれば 声に尋いで自ら回り去らん

鎌首をあげたヘビが赤い舌をペロペロと出しながらこちらを向いている。キョトンとして傾けた顔が可愛い。しかし、ヘビの好きな人はあまりいない。ほとんどの人は気味悪がって後ずさりをする。これがマムシやサソリだったら、悲鳴をあげて逃げてしまうであろう。

マムシにはあまり出会うことはない。マムシは夜行性だからだろうか。いや、そうでもないようだ。昼間でも、日陰の雑木林やじめじめした水辺や草むらでは餌を求めて活動している。水田、畑、野原、山林、水辺、木の根や岩陰などに隠れている。人間が生活をしている周辺に潜んでいるから、不用意に踏み込むと危険である。くれぐれもご注意を…。

サソリの姿は一見してわかる。小さなイセエビに似ていて、体のわりには大きな褐色のハサミが特徴である。小さな体形ではあるが、猛毒をふくんでいて毒針が鋭い。走りも速い。ペットにしている人がいるけれども、毎年のように咬傷事故で死亡する人がいる。

さて、煩惱のうちでも、前回の猛々しい悪獣が「瞋恚」の象徴だとすれば、今回の蛭蛇および蝮蠍は小さな「愚痴」に相当する。猛獣の煩惱に比べれば、こちらは内に毒を秘めた「小随煩惱」である。つまり、うす気味の悪い小さなねちっこい腹の虫である。

雑談に耳を傾けていると、他人の批判や愚痴がいかにも多いように思われる。他人の過失は見やすいけれども、自分の欠点は見難いものである。他の欠点や失敗は、まるで糞殻のように吹き散らして喋りまくる。人が集まったときの話題は、もっぱら上司の欠点や過失、噂をあげつらうブツブツ談が多い。面白ければ面白いほど密談に熱がこもる。私もつつい調子にのせられて花を咲かせてしまうことがある。

ブツブツ菌は三毒のうちの一匹である。三毒とは、「貪り」「怒り」「愚痴」である。百八煩惱の菌類をまとめればこの三毒になる。この菌は、悩みや苦しみをつくる病原菌である。仏典に、「愚痴とは、無常の真理に目がふさがって、因果の道理に暗いこと」とあるから、妄想と知恵不足による愚痴がブツブツ菌の正体のようだ。

笑いのあるブツブツはご愛嬌になるかもしれない。しかし、深刻でくどいブツは耳をふさぎたくなる。愚痴をいい出せば切りがない。土砂崩れのように不平不満が次々と滑り落ちてくる。しつこいブツは人に嫌われ、次第に気分が悪くなるから、ほどほどにして話題を変えたほうがよい。

知能指数が高くても、いつまでもブツブツと愚痴をこぼしているのは、智に長けすぎて己の愚に気づかない愚か者である。ブツブツ談義は内容が否定的である。愚痴からは発展的な知恵は生まれてこないことを肝に銘じるべきであろう。

ブツブツいつている自分の顔を鏡で見えてみてはどうだろう。愚痴は風呂の中の屁のようなものである。ときには、湯の底から立ちのぼる泡の臭いをかいでみてはいかががかな。

ところで、マムシ、ヘビ、サソリは、野獣とちがっていて、こちらから手を出さなければ、まずは襲ってはこない。ここでも観音さまは遠くへ追いやるだけである。ヘビやマムシに出会っても、わざわざ殺す必要はない。ブツブツ菌に気がつけば自ら消え去っていく。いつまでも愚痴っている人を観音さまは笑って見てござる。